
魔鏡の魔術師

Z

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔鏡の魔術師

【Nコード】

N5068BA

【作者名】

Z

【あらすじ】

幾つもの物語が存在する世界 忘却する者（オブリビオン）。

その中の小さな欠片の様なお話。

主人公は王国の騎士団の第3番隊長という地位についている怠惰な18歳の青年。

彼はその『眼』で何を見る？

(前書き)

初めまして、Zです。

設定は設定集を見ればある程度伝わると思っています。

具体的な批判、感想お願いします。

あるところにこんな若者がいた。

魔術師には強いが、それ以外に対しては物凄く弱い。
簡単に言えば、五歳児とケンカして何とか勝利する、という程度である。

これはそんな彼の物語。

~~~~~

俺の名前はリエル・リバーズ。さて、突然だが……。

ベッドから転げ落ちた。

「げふっつ」

いきなりな展開に驚いていると思う。  
でも俺も驚いてるんだ。  
なぜなら……。

「起きてください隊長ー!!」

などと、俺の副官にいきなり布団を剥がされたからだ。

「どづしたのさハインリヒくろ」「どづしたのさじゃないですよー!今日の仕事忘れちゃったんですか!?!」「仕事?」

何かあっただろうか…?

ちなみにベッドから落としたのは、ハインリヒ君。  
俺の副官で男だ。

これだけで君達には伝わっただろう。

何故美女じゃないんだっつ……!!

他のところはみんな、そう、みんな美女なのに……。

まあ、それは置いて……。

真面目に考えないとそろそろ怒られそうだ。

仕事………。そういえば何かあった気が……。

く回想く

謁見の間

「あゝ、オホン。今日お前を呼んだ理由はだな……。」

やあ、みんな。オレオレ、リエルだよ。

主君である、王様に呼び出されてここにいるよ。

「その、理由なのだが……。」

何顔赤くしてんの、このオツサンもとい王様。

「実は、最近出没している盗賊団が民を困らせている、という情報を第一王子が聞いてな。『私が盗賊団を捕まえます!』と言って聞

かんだ。」

そりゃあ困ったもんだな。

「で、その王子が共にお前をと指名しているのだ。」

え？

「私としては、大事な息子が危険な目に遭うのは嫌なのだが…、お前ならばと考えた。」

「え、ちょ、王様、何故俺…いや私なのですか!？」

どうしてこうなった。

「『彼でなければ一人で行く』、と言っていたので仕方あるまい。」

「一人なのは確かに危険ですが…。」

「なら、この件はお前に頼もうか。」

〜回想終了〜

思い出したくない事を思い出した。

「で、王子は？」

「もう用意は済まされていますよ。」

速いことだ。

「じゃ、後20分ぐらい寝かせてもらおうか」

「えっっ！？僕の話聞いてましたよね！？」

果報は寝て待て、というだろう。

「いや、もう随分待たせてますからね！？」

そんなことを言っている時だった…

「失礼するぞっっ！！！！！」

ノックと同時に女性の声が聞こえたのは。

美女キターー！

「突然だが失礼するぞ！！私は…！」

王子の副官らしき彼女の話を要約すると、だ。

王子の共が来ない　王子が出発出来ない　共になっている隊長は誰だ！

というようだ。

もしかしなくても、俺のせい？

「ふんっ！これだからこの隊は落ちこぼれだといっつのだ！」

あ…

「全く。隊全体もこんなだらけきっているようでは使えないだろうに…王子は何を考えておられるのやら…」

ちよっ、ハインリヒ君。

その殺気怖いつて。

「ハインリヒ君は頑張ってるから落ち着いて!!」

小声で何度かそう言つと、殺気も収まってきた。

実はハインリヒ君には特殊な能力がある。機会があればその事について話そう。

しかし、真面目に頑張っているハインリヒ君もこの隊の副官なんだけどなあ。

「副官に全て任せきりだと聞いているぞ!どついつ事だ!」あ、俺の事だ。

「えーっと、それには訳がありました…」

「何だ?訳とは?」

言わないとダメ?

「その話、僕も聞きたいですね。」

っ!気配を全く感じなかったぞ!?

「こんなところまでご足労すみませんね…王子。」

其処に居たのは件の王子<sup>くだん</sup>だった。

「いえいえ。私はあなたに興味がありましたね。」

俺がこんな事言ったら、変態扱いされるぞ。

「もしかして、例の噂通りですか？」

「噂については、分かりかねますが…そのお恥ずかしい事ながら、その。」

言わないといけない空気になってるんだが…。

「さつさと言わないか!!」

はいはい…。

「実は俺……………剣は全く使えず、魔術も初級までしか使えないんです。」

はい。来ましたこのリアクション。  
開いた口が塞がらないとはこの事。

王子はリアクション薄いな…。  
まさか、知ってた？

「あまり驚いてない様子ですけど…知ってました？」

「ええ。だからこそ、あなたを指名したのです。」

マジで!?

いや、確かにまだ隠してる事あるけど。

「まあ、この話は置いて。そろそろ出発しません?」

もう出発しないと時間的にまずい。

「どうやって隊長格まで昇進できたか、それは聞くな、という事ですな?」

「もうその話は置いて下さい」。

いつまで引つ張る気だ、そのネタ。

ハインリヒ君は知ってたから別として、あなたの副官固まっていますよ?

「じゃあ用意をしてくて下さい。街の東側の門で待っていますから。」

「了解です。」

長い1日になりそうだなあ。

~~~~~

「盗賊団の拠点は、後10分程のところの様ですよ？リエル隊長。」

「そうなんですか。王子。」

ヤバい。何がヤバいって、話してる最中も探る様な眼で俺の事見てるんだよ。

俺にそんな気はありませんよ？

ハインリヒ君はハインリヒ君で忙しそうだし…。

って遠っ！

何でそんな距離開けて歩くし。

こんなんじゃ、もし分断されたりしたら…

ドンッッッ！！！！

「うわっ！」

「きゃっ！」

「しまっ…！」

「えっ？」

巨大な岩の壁が突如、俺と王子以外の人間との間に現れた。

もしかして、俺があんな事思ったから……？

俺悪くないよ？決して俺悪くないよ？

「ヒヤッハー！なかなか立派な獲物が引っかけたようだな！」

変な笑い声と共に6人程の男達が現れた。

良かった。俺のせいじゃなかった。

…………… ってマズい！今俺と王子の二人だけだ！

くそつ。『アレ』を使うしかないのか？

「僕が何とか足止めをします。その隙に逃げて下さい。」

何を言ってる…

「巻き込んでしまったのは僕ですので、責任は僕がとります。」

何を言っているんだ、この馬鹿は…

王子が剣を抜くと相手の目つきも変わった。

「こいつ、剣士だぞ！偵察班は相変わらず仕事できてる様だぜ。」

「何？」

王子が低い声で唸ると、リーダーらしき男が、

「お前の装備が一番立派だったんでな、確実に仕留める為に偵察班に武器を見させたんだよ！そして案の定、お前は剣士。こっちはそれを見越して、魔術師を選びすぎて来たんだよ！」

「くっ！」

王子は悔しそうに呻いた。

王子は純粋な剣士だからだ。

「行くぜ！「我が呼び声に応え、降り注げ！！」」

盗賊が一斉に同じ詠唱を始めた。

しかし、この詠唱文は…

「なっ！？上級魔術だと！？何故盗賊がそんなものを！！」

こんなもので彼を死なせる訳にはいかないな。

「ヒャッハハハハハ！死ね！！【ファイア レイン】！！」

仮にも俺の主君の息子だからな。

~~~~~

「くそっもう余裕も無くなってきたな…、おいハインリヒ！此処は私に任せて王子を！！」

「大丈夫。さつき魔術師を集めて来たって、聞こえたから。」

「何を言っているんだ！このままでは王子が！」

「大丈夫だつてば。魔術師相手なら隊長は最強だから。」

~~~~~

突如、盗賊の頭上に【火の雨】が降り注いだ。

「がああああつ！」

「あぢいいいっ！」

「ぐぎやああつ！」

その影響で三人程焼死した。

「てめえつつ！何しやがつた！」

全身火傷だらけの男が吼えた。

俺の方を見ながら。

「大したことはしていないが、ネタばらしといこうか？」

本当に特別な事は何一つしていない。

俺にとっては、だが。

「俺が剣を振らず、初級魔術だけで隊長格になれた理由と同じさ。」

『眼』に意識を集中させ、六角形の紋様を浮かび上がらせる。

「これが、俺の能力 魔鏡眼（ミラーズ・アイ）だ。」

あまり使いたくはなかったがなあ。疲れるし。

「この『眼』で観測できた魔術を相手に反射できるのさ。まさに鏡のように。」

「こ、この化け物があああつ！」

盗賊達が一斉に初級魔術【ファイア ボール】を俺に向かって放つ。

「この『眼』の面白いところはさ、反射する時に俺の魔力を込めると、なんと倍の力を発揮するなんてところさ。」

全ての【ファイア ボール】を倍の威力で反射し、盗賊達を焼き殺す。

唯一人、魔術を使っていないリーダーらしき男を残して。

まあ、気絶してるんだが。

「さ、こいつを捕まえて合流しましょうか、王子？」

ポカーンと口を開けている王子に声をかける。

「うがつつ！筋肉痛がつ！」

痛たたたつ！これだから使いたくなかったのに！

「クツクツク、急いで人を呼んでくるよ。」

笑ってないで速く行って、王子！！

~~~~~

その後にハイソリヒ君達と合流し、筋肉痛に痛む身体を引きずって城まで帰った。

PS 一週間経っても治らなかったなので、合法的に休めた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5068ba/>

---

魔鏡の魔術師

2012年1月14日12時57分発行